

きた。毎日午前中は日本と世界事情等の学習、午後は歌、演劇、壁新聞の発行、バレーボール、バスケットボール等の体育活動が許され、私たちの手でつくられた民主委員会もできた。

昭和二十九年春には全員が自己坦白を終わり、自己の罪行を中国人民の前に暴露し、戦争に反対し平和を守る人にならなければならない態度に思想変革した。

昭和三十一年四月、中国政府の裁判により無罪判決、中国人民政府と中国共産党の寛大政策に涙を流して感謝した。同年五月、中国政府は私たちを三週間にとわって東北、山東方面の会社、学校、農村、商店等発展の状況を知らせるために旅行の処遇を受け、新中国の発展に目を見張った。

昭和三十一年七月末、中国赤十字社の招待を受け、初めてビールで乾杯を受けた。間もなく天津に集結し、五十円の金をいただき、市内の外出も許され、お土産物を買った。七月三十日、天津を後に、八月一日、十一年目によつと懐かしい舞鶴港に上陸し、夢に見た母や妻、兄と再会することができた。

抑留記

長野県 茅野道寛

昭和十六年渡満。昭和十九年チャムスで徴兵検査。昭和二十年二月二十日現役兵として関東軍三〇六部隊へ入隊（東満東寧近くの石門子）。同四月末移動部隊となって南朝鮮馬山近くの三千浦で幕舎生活をしながら訓練とタコ壺掘り。八月ソ連軍参戦。これを迎え撃つため再び移動開始。普州駅から北上するため、糧秣弾薬を積み込み十五日朝出発の予定だった。午後重大ニュースがあると、いうことで出発が延期された。予想に反して敗戦の知らせ。

口惜しさで泣けた。しかし反面「これで死ななくてもよくなった」という安堵感のあったことも否定しない。時に階級は幹部候補生の座金の上等兵。でも初年兵であることには間違いない。上層部の考えていることなど全くわからなかった。夜遅くなって「我が部隊は、師団の

先発隊となつて明十六日朝初めの計画どおり北上する。」
ということだ。列車は出発した。この軍用列車に乗ったこと
で、シベリア抑留の切符を握らされたのだが、そのとき
神ならぬ身の知る由もない。戦闘に負けたことを知り
ながら戦争するために出発したのである。しかし命令は
絶対であり、そのときには全く矛盾を感じなかったのが
不思議である。

朝鮮の鉄道は複線であつた。停車駅では、戦闘も交え
ず逃げてきた関東軍の部隊が南下すべく反対車線の列車
は兵隊で満員。昼間から酒を飲んでいて「戦争は負けた
のだ。釜山經由で内地へ帰るんだ。こちらの列車へ乗り
移れ。一緒に連れていってやる。」などと云っている。同
じ日本の軍隊が、片や逃げ帰るべく南下、片や戦闘のた
めに北上。一体どうなっているのか。

また、現地住民の群衆が駅の広場などで、即製の朝鮮
の国旗を振りながら鐘太鼓を打ち鳴らして、解放と独立
を祝い踊り狂っているところを何か所かで目にした。京
城駅では満州から避難してきた女、子供の集団がブラッ
トホームの隅で列車の動くのを待っている姿も見た。

我々の乗った列車はさらに北上、平壤駅で下車。八月
何日だったかは記憶にない。一人の逃亡者も出さずにと
言いたいところだが、あとで聞いた話では朝鮮出身の兵
隊と日本人の下士官の二人が姿を消していたそうであ
る。

九月二日武装解除。平壤郊外三合里の旧日本軍の練兵
場の兵舎に収容され、周囲のバラ鉄線を自分たちで張つ
た。敗戦の年の冬はここで過ごした。特に決まった作業
もなく、炊飯用のまき取りに出掛けるぐらいだった。

糧秣も旧日本軍のものが支給されたので、それほど苦
にならなかつたが、発狂者が出たり、逃亡者が捕らえら
れ、目の前で銃殺されたのが恐ろしかった。病気による
死亡者は少なかつた。

昭和二十一年七月、汽車に乗せられ咸興の港から船で
ナホトカへ連れていかれた。シベリアの土を踏まされた
のである。敗戦時の原隊そのままなので初年兵は相変わ
らず酷使された。「各班から、大工や左官を出せ」とのソ
連軍からの命令。そんな技能を持った人は一人もいな
い。けれども命令である。抽選で出すこととして当たっ

たのが私であった。入隊以来一緒だった者たちとの完全な別離だった。あとで考えてみると幸運だったのかも知れない。彼らは一か月以上の糧秣を積んでシベリア鉄道に乗せられて北へ向かって連れ去られて行つた。待つている先は炭鉱か森林伐採か。

私たちは、それから数日後、再び港から小型の船に乗せられ、着いた港はウラジオストック。昭和二十一年八月初めだった。この日から翌年の二十二年五月に帰国するまでの十か月ウラジオでの生活が始まった。

収容施設

幕舎。次に係留された小型の客船、さらに移動して木造の収容所。

作業内容

夏場は海水浴建設の基礎工事、ふんどし一つで海にもぐりコンクリートブロックを積み上げる。秋から冬にかけては、千島列島から大型の貨物船で運ばれてきたサケやカニ缶詰の陸揚げや缶詰の箱詰。(もちろん日魯漁業などで、捕獲し加工したもの。)古材使つての家屋建築。柱と柱の両側へ板を張つてその空間へ石炭がらを詰め込

んで防寒壁にしたことが記憶に残っている。時には駅の引込線に止まっている貨車から石炭を降ろしたり、セメントの粉をバラで積み込んだり、真っ黒になったり真っ白になったり。また収容所長のアルバイトだったと思うが、一般家庭の雑役、凍りついた坂道の氷割りなど。真冬は、防空壕の工事が再開されて地下のトンネル掘り。削岩機の振動がすきっ腹に響いてこたえたが、寒くなくて助かった。ノルマはなかったので気楽だったが、給料は一銭も出なかった。

衣生活

敗戦の冬を平壤で過ごしたということもあり、防寒の衣服も自分で持っていたので不自由した記憶はない。

食生活

一番困つた。平壤では、旧軍の米を食べていたがウラジオへ着いた途端、ろくに精麦もしてないような燕麦をどろどろに煮たかゆ状のもの。一週間くらいはのどに通らなかつた。先に収容されていた人たちは我々の食べ残したものを、待っていましたとばかりにむさぼるように食べていた。日数がたつうちに空腹に耐えられず、食べ

られるようになり、なれてきた。そのうちに黒パンも出るようになったが、生野菜は一度も食べたことはなかった。たまに馬鈴薯や菜っ葉の乾燥したものが出た。

衛生環境

シラミの卵つぶしは寝る前の日課。発疹チフスで入院する者も多かった。栄養失調で慢性の下痢患者がほとんど。朝起きると冷たくなっている者を何回か見て、次は自分の番かと話し合ったこともある。夜中に突然「ウォー」という叫び声で眼を覚ましたが、翌朝その人は冷たくなっていた。トイレはたれ流し。野菜不足によるビタミンC欠症で皮膚に黒紫の斑点のできる壊血病。空腹、栄養失調で身体のだるさが抜けない毎日だった。

文化活動

民主化運動など、読物、楽器などは全くない生活。演芸会などやろうとするムードも気力もなかった。そのうちに民主新聞が配られるようになった。諸戸文男（ヒロトフ）のペンネームで、社会主義賛美、日本軍国主義の批判、攻撃などの内容記事が多かった。ハバロフスクで発行されているとか聞いた。たばこの巻紙がなく困って

いたので助かった。この新聞を手掛かりに洗脳教育の学習会を開くこともなかったし、オルグが来るようなこともなかった。また人民裁判で同胞をつるし上げるようなことも全くなかった。もっとも寄り合い所帯で兵も下士官もなく上下の区別もほとんどなく、あまりトラブルも発生しなかった。ただ将校だけは、間仕切りした小部屋で寝泊まりしていた。

帰郷

昭和二十二年五月はじめ、女医による月例の身体検査があった。裸にしてまず手の指と指の間を見る。伝染病の皮膚病の検査である。次に身体全体を見る。ビタミンC欠乏症による皮膚の斑点を見つけられて、「バルノイ、ダバイ。」翌朝病人とされた者は荷物をまとめて、舎外へ整列。「野菜不足で病気になった。気候もよくなったからコルホースへ行つて軽作業をしながら病気を治す」とのご託宣。このとき、頭の中をかすめたのは、「今度は帰れるかも知れない」ということだった。なぜなら今までは移動のたびに「日本へダバイ。」が口ぐせだったから。

列車が着いたところはナホトカ。予想は幸運にも当

たつて帰還者の仲間入りができた。

何日か待って、船が来た。乗船のとき、「民主化教育に對して感謝の署名をしろ。」という。口惜しかったから何とか逃れることができないかと考え、十人ぐらいつつ集団をつくって署名するので署名をしたような真似をして一目散に船のタラップに飛び移った。後ろから呼び返されているような気がしたが、振り向かず船の中へ逃げ込んだ。舞鶴港上陸は五月二十三日。松の緑の濃さが目に焼きついている。

ソ連抑留記

栃木県 橋本 満

昭和二十年八月十五日、北朝鮮吉州（キルジュ）で終戦を迎えた私は、昭和十六年七月十五日召集になり、仙台市の東部第三六部隊に集合して軍装を受領し、三日後には北朝鮮第十九師団（羅南）に入隊した。師団通信隊鳩班に配属になり、ちょうど八月十三日に京城の二十師団

に連絡のため軍用鳩四、五羽を携行して京城に向かう。列車が途中の元山駅に入ったとき、ソ連の軍用機から爆撃された。幸いホームのタコ壺の中に避難したが、同列車には日本軍の爆弾が満載していたので、駅舎ともども炎上した。沿線の列車とレールはソ連機によって爆破され、私は行くも帰るもできないので、その旨を鳩に託して最後の通信を完了した。翌々日終戦のラジオ放送を元山の満鉄官舎で聞いた。官舎の庭の片隅に真紅に燃えるように咲いていたケイトウの花が涙でかすむ瞳に写った風景は、四十年たった今でもありありと焼きついている。

翌十六日には、ソ連軍第一線部隊が乗り込んできた。日本軍は武装解除され、私は近くの部隊とともに約一か月間は北鮮を引きづり回されて、最後は羅南の近くの清津港から乗船を命ぜられた。

その間ソ連兵は、「おまえたちは日本に帰されるのだからおとなしくしろ」ということだった。しかし、乗船してから「だまされた」と感じたのは翌々日くらいだった。それは、日本に向かうのなら日本海に出るはずの